

平成 27 年度 第 3 回昭島市廃棄物減量等推進審議会 議事要旨

1.概要

○開催日時：平成 27 年 11 月 17 日(火) 19:00～21:40

○開催場所：昭島市役所 3 階 301 会議室

○出席者

◇委員：宮脇 健太郎会長、荒井 康裕副会長、加藤 久之委員、田中 淳志委員、西村 沙理委員、豊田 範雄委員、原島 良昭委員、井ヶ田 博委員、秋山 伸子委員、森本 三郎委員、穴吹 徹委員、荒畑 恵子委員、奥村 展子委員、高橋 聖子委員、長谷川 京子委員(欠席者なし)

◇事務局

昭島市：山下環境部長、峰岸ごみ対策課長、青木清掃センター長、池和田ごみ対策課ごみ減量係長、近藤ごみ対策課リサイクル係長、青木清掃センター業務係長、佐々清掃センター施設係長

◇コンサルタント会社：佐久間、北本

2.報告・確認事項

事務局より、前回の審議会で挙げた質問、確認事項についての報告が行われた。報告は、以下の参考資料 1 から 4 の内容に則って説明を行った。

○参考資料 1 第 2 回昭島市廃棄物減量等推進審議会議事録案(要旨)について

○参考資料 2 部門別ごみ処理経費と指定収集袋歳入の推移

○参考資料 3 ごみの水切りについての自治体における施策、PR 方法について

○参考資料 4 多摩地域における家庭ごみ減量先進 5 市と昭島市の収集状況、実施施策比較

【質疑内容】

- ・参考資料で他市の水切りの施策を紹介したが、昭島市としてはどのような水切りの施策を推奨するか。推奨するものがあれば説明していただきたい。(加藤委員)
- ・他市の水切りの取組を調査して、各自治体が様々な方法で水切りに取り組んでいることが分かった。今後はこれらの方法を検証してみて、どの方法が昭島市にとって効果的なものとなるかを見極めたい。特別に効果の高い方法が無い状況のなか、手間が掛かる方法だと市民が取り組めないと思うので、なるべく手間がかからず効果があるものを検証し、推奨したい。検証を行ったのちに広報を行う。(事務局：峰岸課長)
- ・事前に資料を拝読したが、先進 5 市で行っていて本市で実施していないなど、極端に差が出るような施策はそれほど多くはなかった。先進 5 市の中で、ごみ減量活動に取り組む事業者に対する認定などを行っている市はあるが、家庭ごみにおいては他市と比較して、昭島市が特に実施していない取組があるという印象はない。(宮脇会長)

- ・減量された重量を、ドラム缶の本数で表すなどして説明をすればどうか。水切りがなぜ必要なのかが市民にわかるように広報を行えば、ただ広報を行うよりは効果がある。ドラム缶に換算するなどして表現すれば、減量された数字をただ述べるよりは一般の人にとっても具体的なイメージが湧き、分かりやすいと思う。中間報告でもそのように表記したほうがいいのではないか。(加藤委員)
- ・よく、体積を示すときに「東京ドーム何杯分」という表現をするが、それと同じように数量はイメージしやすい身近なものに例えたほうがいい。(宮脇会長)

3.議事内容

議題1 中間まとめ(案)について

「第四次昭島市一般廃棄物(ごみ)処理基本計画」の策定に伴う一般廃棄物の減量及び再利用の促進等に関する事項の、中間まとめ(案)資料について説明を行った。資料の内容が多いので、項目ごとに区切って説明を行い、質問を受け付けた。

【質疑内容】(項目1から3について)

特に質問や意見等は挙がらなかった。

【質疑内容】(項目4について)

- ・数字の後に括弧書きで記載するような形でもいいので、分かりやすい表現を併記してもらいたい。(加藤委員)
- ・先ほどもご提示いただいたように、読み手にイメージが伝わるような例示のほうがいい。例えば500トンという数字は、風呂桶2,500杯程度となる。(宮脇会長)
- ・数字の羅列よりも、そういう表現の仕方のほうが分かりやすい。(加藤委員)
- ・通常の生活に関わる、身近にイメージしやすいもので例えたほうが良い。ドラム缶などではイメージの湧かない人もいる。(宮脇会長)
- ・「(3)市民・事業者・本市の三者による取組の推進」に記載されている「本市」が、「誌」という漢字になっていた。(奥村委員)
- ・資料の印刷の都合で修正が間に合わなかった箇所については、配布した正誤表に記載されている。そちらを最初に確認すべきであった。(事務局：峰岸課長)
- ・基本的には日本語の細かい修正についての誤りを修正している。配布した正誤表を前提に、まだ事務局が見落としている日本語の表現等もあるので、気になるところがあれば随時ご発言をお願いしたい。(宮脇会長)

- ・正誤表の修正番号4について、変更箇所がどこかわからない。(森本委員)
- ・文中で「大量消費型のライフスタイルの」と「の」が続いている表現になっているので、「大量消費型ライフスタイルの」に変更した。(事務局：峰岸課長)
- ・他にもひらがなや漢字など、表現のゆれの統一などを行った。(事務局：山下部長)
- ・資料の5ページ上部のグラフについて、あきる野市、日の出町、奥多摩町、檜原村の数値を入れないうほうがよいのではないか。この4市町村は事業系ごみとの合算値を記載しているので、一見すると分かりづらい。(森本委員)
- ・グラフの数字は毎年統計を実施している「多摩地域ごみ実態調査」の数値を用いて作成している。そこに先ほどの4市町村の数字も記載されているので、同様に記載している。下部の注意書きに、これらの4市町村は事業系ごみを含んでいることを明記している。第三次計画においても注意書きを添えて、その4市町村のデータは載せている。(事務局：峰岸課長)
- ・出典が書いてあるのでこれらの4市町村の数値も記載しなければいけないが、注意書きを四角の枠の中に入れた方が分かりやすい。(田中委員)
- ・6ページに記載している事業系ごみのグラフには、これら4市町村についての注釈を載せていないのか。(事務局：山下部長)
- ・これらの4市町村において、事業系が0の理由も記したほうがよい。(宮脇会長)
- ・家庭ごみと事業系ごみが混合収集であることを記したほうがよい。この4市町村だけは色を変えるなどしてはどうか。(穴吹委員)
- ・4市町村だけ白抜きにするという手もある。現状だと注釈を見ない限り気付かない。(宮脇会長)
- ・枠の中に入れて、色を変えれば分かりやすい。(穴吹委員)
- ・第三次計画では、事業系ごみの比較のグラフにも注釈が記載されていた。今回の中間まとめ(案)にも注釈を追加する。(事務局：峰岸課長)
- ・グラフの見方などでも意見があれば、積極的に意見を述べていただきたい。(宮脇会長)
- ・「(3) 市民・事業者・本市の三者による取組の推進」の追加した内容で「処理システム全体を合理的なシステムにする」と記載しているが、その部分だけ突然「システム」という言葉が続いている。市民としても、急に「システム」という単語が出てくると混乱が生じる恐れがあるので、「方法」や「仕方」などの表現のほうが適切ではないか。例えば「処理の方法・仕方を合理的なもの」と

することで」、などの言い方ではどうか。(井ヶ田委員)

- ・そもそも「システム」という言葉自体が「全体」という意味なので、重複している。(宮協会長)
- ・「システム」という言葉が何を指すかがわからない。家庭ごみの削減は個人レベルで実施しなければいけないのに、「システム」というように記載されると訳が分からなくなる。(井ヶ田委員)
- ・「処理方法全体を合理的にすることで」などの言い方に修正したい。(事務局：山下部長)
- ・7ページの「①家庭ごみの分別の徹底」について、「重量に換算すると」という言葉を、家庭ごみ25,000トンのうちの500トンが減量になるという意味であれば、「家庭ごみに換算すると」という言い方にしてはどうか。(穴吹委員)

【質疑内容】(項目5について)

- ・前の項目に戻るが、少し気になっているところがある。13ページの「(7) ごみ処理経費の削減」について、表現の仕方の問題になるが、ごみが減ってもごみの処理経費が変わらないという表現をしている。市民が努力してごみを削減しても経費が変わらないという記載の仕方では市民に誤解されるのではないかと思うので、何かいい表現はないか。(加藤委員)
- ・「ごみ処理経費の削減」という見出しになっているにもかかわらず、削減されていないことが気になるという意見と思われる。(宮協会長)
- ・下のグラフが「経費の推移」と記載しており、推移とは変化という意味なので、変わらないのであれば、表現の問題だが、タイトル自体が「削減」となっていることはよいのではないか。(宮協会長)
- ・変わらないという言い方を何かいい表現に変えた方がよいのではないか。我々は審議会で説明を聞いているが、パブリックコメントの際に、市民から指摘を受ける可能性がある。(加藤委員)
- ・清掃事業における課題について記載している箇所であり、削減を目指すという考え方を示しているのだから、そのままでもいいのではないか。(穴吹委員)
- ・そうすると削減の目標を立てるべきということにもなる。家庭ごみの排出量など、他のものは削減の目標を立てているのだから。(加藤委員)
- ・文中に説明を行っているので、「ごみ処理経費の削減」という項目名にしなくてもいいかもしれない。(事務局：山下部長)
- ・「削減」は課題である。(穴吹委員)

- ・課題といいながらも、何年間も課題であり続けているままである。課題であれば1年か2年で解決しなければいけないのに、解決できていないということは課題ではなく、体質の問題となってしまう。課題ではなくなってきたと思ったので気になった。(加藤委員)
- ・他のものが「向上」や「推進」と記載しているので、表題を揃えるならば「削減」と記載することとなる。「推移」となると、少し弱い意味に捉えられてしまう。事務局には検討をお願いしたい。(宮協会長)

【質疑内容】(項目6について)

○家庭ごみの排出量の目標値設定

- ・目標数値の設定の資料について、②のグラフの中に記載されている $y=-40.811\ln(x)+719.13$ というのは関数か。(高橋委員)
- ・そのとおり。近年の実績値を用いて統計的に算出した値である。(コンサル：北本)
- ・事務局から、この数値ならば実現できるという目標値の提案はないのか。(加藤委員)
- ・近年の実績値を参考にするのであれば②の 593 グラムを目標値とする考えもあるが、目標ということであるので多摩地域において家庭ごみの排出量が少ない先進市の平均である 556 グラムを目標として、より数字を分かりやすくするため、555 グラムを目標としてはどうかと考えている。(事務局：峰岸課長)
- ・目標値は少ない方がいいとは思いますが、指定収集袋の有料化などにより市の家庭ごみの排出量が減少しているなか、これ以上減らそうというのであれば、市がどう市民に働きかけるか、それで市民にどう反映されるか、どう動くかで目標数値がどのくらいになるかの目安が見える。ごみ袋有料化や水切りなど、先ほどの資料に記載してあったように 10%ごみの量を減らすために、市がどう働きかけるかが重要だと思う。目標が立派でも、それに向けてどう動くかが心配である。具体的な提案がはっきりしないと、現行のまま順調に減っていき、②の数値目標となると思うが、いかがだろうか。(秋山委員)
- ・大きな取組や施策がない限りは、現在の減少率を維持することになるということか。(宮協会長)
- ・家庭の主婦の感覚としては、ごみの有料化をしてからは、より家で出すごみの量は減らしたいと思っているが、より家庭ごみを減少させるとなると、もう少しインパクトのある取組を実施したほうがいいのではないか。(秋山委員)
- ・先進5市においても様々な取組は行っているが、実際に昭島市が現在行っている取組と大差はない。(宮協会長)
- ・他市の取組についても、前回の審議会で他市の取組を知りたいという意見が挙がったため、詳細に

調べていただいている。取組は同じだが、これらの取組を実践していない市民は多いのではないか。それらの取組を実行させるための、具体的な手段は何かあるのだろうか。(秋山委員)

- ・市は減量の啓発活動を引き続き継続しており、これからも継続するが、指定収集袋の有料化以降、一定程度ごみの排出量が削減されたあと、このままだと減量は既に限界に近いところまで来てしまっている。これからごみの減量をさらに推進するためには、より一層の啓発活動が必要になる。まだ手法が定まらない部分もあるので、引き続き粘り強く広報を行うことが一つの手段ではないかと思う。計画の中にどう具体的に盛り込むかは、検討している最中である。(事務局：山下部長)
- ・例えば、小学校や中学校での給食の食べ残しの量が多い。日本は世界的に見ても食べ残しが多い国なので、そういうところから変えなければ、根本的な解決には結びつかないのではないか。食べ残しなどについての教育など、子どものうちから教育をする必要があるのではないか。(井ヶ田委員)
- ・昭島市の総人口は減っているのか。人口が減っているならば、これからごみの量も減るのではないか。(西村委員)
- ・市内の世帯数は増えている。(加藤委員)
- ・世帯数は増えているが、人口はこれから減少する傾向にある。(事務局：青木清掃センター長)
- ・人口推計によると、市内にまだ未開発の土地があるので、そこの開発を行えば人口は増えると予測されている。しかし一定年度になると、ゆるやかに減少していく。(事務局：山下部長)
- ・一人一日あたりのごみ量については、全国的な統計で、例えば三人家族と、四人家族におけるごみの量を比較すると、家族構成人数が多い方が一人一日あたりのごみの発生量は少ないという結果となっている。つまり、単身世帯が増えると、一人一日あたりのごみ量は多くなる。また、単身世帯の中では、若者よりも高齢単身者のほうがごみの発生量が多い。人口が増えても一人一日あたりのごみ量は変わらない場合もある。しかし、世帯の人数構成比の変化は、ごみの発生量を変化させる要素となり得る。(コンサル：佐久間)
- ・市内は現在 60 歳以上の人が多く、若い人が少ない。(加藤委員)
- ・今の話だと、高齢化は全国的な問題であり、全国的に同じ傾向になると考えられる。同じ取組を実施しても、逆にごみの量が増えてしまうという結果にもなりかねないという指摘でもある。(宮協会長)
- ・委員に数字を求められても困る。いろいろ数字が出てきてしまい、收拾がつかない。市から数字の提案をしていただけないか。(加藤委員)
- ・根拠が少し弱いですが、555 グラムという提案はあった。先進 5 市と昭島市で、人口構成が大きく変わる

とも思えない。(宮脇会長)

- ・市の広報紙を見ていると、世帯数は増えているが人口は減っていることがわかる。先月でも人口は 26 人減少しているが、世帯数は 55 世帯増加している。大体毎月人口は減っており、世帯数は増加している。(原島委員)
- ・提案された目標値の根拠がない以上、委員に数字の採択を任されても困る。数値の根拠を明確に示したほうがいいのではないかと。(加藤委員)
- ・会長、副会長、ともに審議会の前に事務局から説明を受けたが、中間まとめの 5 ページのグラフで昭島市の排出量が多摩地域全体でどの程度なのかを見たときに、多摩地域における平均と同程度だということがわかる。秋山委員がおっしゃったように、更なるごみの排出量削減には取り組むべきなので、数値目標は設定しなければいけない。多摩地域における先進地区が府中市などの市なので、昭島市としては、それらの先進地域に追いつかなければいけない。上位市の平均が③の目標値である 556 グラムなので、先進地域を目指す昭島市の目標数値としてはこの程度でいいのではないかと。目指すべき数値として、会長、副会長、事務局とでその辺りにすることで理解している。
委員で目標値が決めにくいというのであれば、市が想定、許容し得る数値として非現実的ではない数値なので、人口構成や世帯構成に大きな差がないと考えれば、このくらいの数値を家庭ごみの目安として設定してみてはいかがだろうか。(荒井副会長)
- ・最初からそのように説明したほうが、時間の無駄にならずに済む。(加藤委員)
- ・パブリックコメントで全市民の目に触れるので、大きな異論があれば考え直す。(宮脇会長)
- ・多摩地域における先進地域の排出量を目指すというのは、市民にも理解しやすい。国の計画やトレンドでの算出よりわかりやすいものではないだろうか。(穴吹委員)
- ・特に一人一日当たりのごみ量は市民が直接努力できる数値なので、他市が頑張っていて実現している数値ならば、昭島市でもできると市民も実感してくれるのではないかと。(宮脇会長)

○事業系ごみの排出量の目標値設定

- ・市としては、類似した市町村の排出量を平均化した 5,327 トンという数値を、目標数値として設定してはどうかという提案である。(宮脇会長)
- ・補足として、数値目標パターン③について、「平成 37 年度における昭島市の推計人口である 109,176 人をかけた 5,327 トン」と記載している。先ほど西村委員が質問していたように将来的には人口は減少するという人口推計をもとにして算出した値である。(事務局：山下部長)
- ・市民の努力で変わる数値ではなく、景気などの要因が絡む。景気の動向は我々には予測しづらいので、今よりは減らす方向で数値の設定を行っている。(宮脇会長)

- ・事業系ごみの排出量が最も削減された平成 23 年度より削減しているのか。(加藤委員)
- ・削減した目標としている。(宮協会長)
- ・家庭ごみより現実に即して、より丁寧に解釈をしている。家庭ごみでは低め、程々、高めという目標数値を設定しており、先進 5 市が取り組んでいるものに頑張って追いつこうという考え方で設定した。しかし、事業系ごみはそのように決めてしまうと無茶な設定になる。これまでの動向を考えると、このまま横ばいか、あるいは数値目標パターン③程度が妥当なのではないか。根拠としては、多摩地域の類似地である市の排出量を参考に近似値を設定するというので、このような根拠を使いながら、無茶な目標を設定してもいけないので、ごみの種類に応じた丁寧な設定をしているのではないか。家庭ごみと違い事業系ごみは大きくごみの減量が進んでいるので、ひとまずは第四次計画においては、高めの数値を設定するということである。(荒井副会長)
- ・イトーヨーカドーにおいて、ごみの総排出量がどのくらいかは把握できないが、処理費用として金額での計上は行っている。コストや排出量の削減は企業として当然努力しており、できる限り分別をしてごみを排出している。食品廃棄物も減らしていかなくてはいけないが、廃棄が出ないように商品を用意してぴったりに売ろうとすると、不足した場合は買えないということにも繋がるので難しいが、可能な限り努力したい。10 年後、どのようにごみを減らすかはなかなか思いつかず、思い切った削減については言えないというのが現状である。(豊田委員)
- ・平成 23 年度までの 8 年間で事業系ごみは半減に近い大幅な排出量削減をしており、これは市内の大量排出事業者の懸命な努力による結果だと思われる。ここ最近で減量が進んでいないのは、企業としては排出量が増える要素があるが、企業側の努力で横ばいに食い止めているということも考えられる。(宮協会長)
- ・可燃ごみは市に排出しており、缶など他のものはそれぞれの業者に回収してもらっている。基本的には、可燃ごみしか市には排出していないので、可燃ごみを削減する努力をするが、その中でも食品廃棄物が大半を占めている。(豊田委員)
- ・豊田委員から今後も努力をするという発言をいただいたが、他に意見はあるだろうか。現状の数値でよいというわけではないが、事業系ごみに関しては雑巾を絞り切ったような状態なので、手は尽くしたという感覚である。提案された数値でよいか。(宮協会長)
- ・よいのではないか。(加藤委員)
- ・よいと思うが、目標数値の算出はどのように行っているのか。(穴吹委員)
- ・多摩地域の排出量類似市における一人一日当たりの事業系ごみ排出量である 133.7 グラムと、平成 37 年度における想定人口と日数 365 日をかけて算出する。(コンサル：佐久間)

- ・資料中のグラフについて、昭島市を指す点がずれている。目標設定そのものには大きく関ることではないが。(宮協会長)

○総資源化率の目標値設定

- ・市としては、近年の実績値を踏まえて算出したパターン②の 41.3%を目標値として設定してはどうかという提案である。先進市を目標にした方がよいのではないかという考えもあるが、昭島市の場合、実際に可燃ごみの中に含まれているリサイクル可能な紙がどのくらいあり、リサイクルした場合に達成できるのかどうかということが 13 ページで試算されている。先進市の 43.4%という数値を設定すると、リサイクル可能な紙をすべて資源化しても達成できないというのが実情である。したがって、少し低めの数値に設定している。(宮協会長)
- ・14 ページの表に、現状の組成分析による可燃ごみに含まれるリサイクル可能な紙について、資源化した割合による総資源化率の表がある。リサイクル可能な紙を 100%分別して資源化した場合の総資源化率が 43.2%、75%資源化した場合の総資源化率が 41.7%という計算になっている。したがって、パターン②の 41.3%を達成するには、リサイクル可能な紙の 75%に近い量が分別して出されることが必要となっている。(事務局：峰岸課長)
- ・目標数値を 41.3%に設定したいということは理解したが、第三次計画における平成 31 年度の総資源化率の数値目標が 49%となっている。目標数値を前回よりも低く設定することを、どのように説明するのか。また、平成 31 年度は目標値を 49%としたままで設定するのか。(田中委員)
- ・49%という数値は高い目標ではあるが、目標はなるべく高いほうがよい、という当時の審議会の方向性から、一番高い数値を目標数値として設定した。しかし、容器包装の軽量化など資源ごみを取り巻く状況が変わってきており、近隣市の一般廃棄物処理基本計画の改定においても、以前設定した 50%という目標数値を 45%に見直したという例もある。こうしたことを考えて目標の見直しを行った、という説明になると考えている。

また、平成 31 年度における目標数値については、新しく設定する数値をもとに、新しい目標に切り替えて設定を行う。平成 37 年度が目標年度となるので、中間目標年度である平成 32 年度はその中間値を目標値として設定する予定である。(事務局：峰岸課長)
- ・豊田委員に質問だが、消費期限が切れて廃棄する食品を、店員に分けるということはできないのか。それをすればごみが減ると思うが。(高橋委員)
- ・不正に繋がるので、基本的には廃棄食品を従業員等が持ち帰ることを禁止している。店舗は限定されているが、廃棄食品に関しては、セブンファームというセブンイレブン系列の農場へ運んで肥料にして、食品廃棄物を減らすよう努めている。従業員等に配布することは基本的には行っていないし、今後も実施する予定はない。(豊田委員)
- ・食品の場合は消費期限の問題などもあるので、事業者は気を使われていると思う。(宮協会長)

- ・ 豊田委員に質問だが、イトーヨーカドーでは、現在トレー類はどのような種類のものを回収しているか。白いトレーだけか、色つきものや透明パックのものも回収を行っているのか。(荒畑委員)
- ・ 確認しないと細かい部分は把握していないのでわからない。(豊田委員)
- ・ 他のスーパーでは透明パックを回収しているところもあるが、イトーヨーカドーではどうなのか。(荒畑委員)
- ・ 店頭でトレーの回収は実施し、リサイクルを行っているが、細部に関しては店頭に戻り調べてみたいとわからない。(豊田委員)
- ・ 減量のことを考えると、もし透明パックを回収していなければ、店頭での回収を開始してはどうか。透明パックが家庭ごみとして市に排出されることが少なくなり、イトーヨーカドーとしても市に排出するのではなく、独自に処理を行うというのであれば、市としてはとても助かると思う。希望としてだが、そのような努力を、今後も事業者として続けることをお願いしたい。(荒畑委員)
- ・ 確認をしておく。(豊田委員)
- ・ 今回は、数値としてはかなり精査されているが、41.3%という数値目標も、可燃ごみとして排出されているごみの中のリサイクル可能な紙ごみを、70%の市民がリサイクルに協力しなければ達成できないので、実際の感覚からするとかなりハードルは高いと思われる。この数値目標に設定したとしても、10人中7人が綺麗な紙ごみは可燃ごみに入れないようにごみを出すという計算になる。10人中7人ができるかという現実から離れている数字なので、達成の難易度は高い目標ではある。(宮協会長)
- ・ 資料中の紙ごみの数値は、現状のごみ収集を継続した場合の話となっている。例えば、現在収集を行っていない古布など、新たな資源となるものを分別して収集を開始すればもう一段上の目標も視野に入るのではないかと考えられる。(事務局：峰岸課長)
- ・ 参考資料4にも掲載しているが、古布の収集を実施していないのは昭島市だけである。これを実施すれば、更に資源化率は上がってくる。(事務局：山下部長)
- ・ もし、収集できないとしても、環境コミュニケーションセンターに持ち込めば無料で引き取ってくれるような受け入れ態勢を作ってもらえないか。(穴吹委員)
- ・ 持ち込みでの無料回収は、現在も実施している。(荒畑委員)
- ・ 現状は試験的にプラザ棟で実施している段階である。(事務局：峰岸課長)

- ・平成 26 年度においては、可燃ごみの組成割合による古布の回収量は 2,756 トンであり、結構な量が収集される。(穴吹委員)
- ・古布は、小さい子どもを育てている若い人が多く排出している。週 1 や月 2 で、定期的に回収を実施すれば、市民も習慣として根付くのではないか。(荒畑委員)
- ・古布は収集、処理においてかなりのコスト、すなわち税金がかかる。持ち込みであればお金がかからないが、回収では結構なコストがかかると聞いている。市内に古布を扱っている事業者がおり、上手く機能している自治体の例もあるが、もし、市内に古布を回収する業者がいなくなると、収集・運搬のためにコストがかかり、CO₂ の排出量も多くなる。広い意味での地球環境には良くない。(宮協会長)
- ・以前「昭島のあすを創る協議会」でバザーを実施した際に、古布の回収を行ったが、着られない衣類ばかりが集まり、結局ごみとして出した。バザーでは着られないものを持ってくるのでごみが集まるばかりである。(加藤委員)
- ・古布の回収を実施している自治体は沢山あるが、収集されたものがすべてリサイクルされているとは限らず、加藤委員のおっしゃったように選別された段階で再利用できないものは可燃ごみとなってしまう。市民に持参してもらえれば、対象外のものを回収せずに済む。(宮協会長)
- ・着られる洋服であれば、フリーマーケットや古着屋などの、市場での既存のリサイクルシステムで事足りるので、必ず市が実施しなくてはいけないものではない。着られる服であれば、自分が着なくても他の人に着てもらえれば十分だという考え方もあり、既にそのようにしている人もいるのではないか。話を聞いていると、いろいろな問題があり簡単にはいかないのだろうと思う。(荒井副会長)
- ・私の住んでいる市においても布の回収を実施しており、雨が降っていても回収をしているが、汚れてしまった布は資源化できないので選別の段階でごみとして処理されてしまうのではないかと気になっている。昭島市が取組を始めていることをもっと広げて、持ち込みであれば、濡れる状態で回収されることはない。そうであれば、新しく回収を始めなくても、高い数値目標も達成できるかもしれない。
紙ごみの目標設定だけでも難しい数値となっている。今の状況を考えると、10 人のうち 7 人が紙のリサイクルをできるかという、1、2 割程度の人しか徹底的に分別に協力してくれないのではないか。布の収集を含めて考えるというのも手である。近隣の市で高い資源化率を実現しているため、市として思うところもあると思うが、市民が実際に取組をしても達成できない目標を立てることには疑問を感じる。
全国平均で見ても総資源化率は 20%程度であり、現状平均で 30%を越えている多摩地域はとて高い総資源化率であるといえる。そこから更に高い目標数値を設定したとして、いつまでたっても達成されない目標を設定しても意味がないのではないか。41.3%という数値もかなりハードルが高いと思っている。(宮協会長)

- ・可燃ごみの中のリサイクルが可能なものの大部分は紙と生ごみである。生ごみはコンポストや水切りなどを推奨している自治体は多いが、若干減量のハードルが高い。紙ごみの特徴としてリサイクル率が非常に高いことが挙げられ、特に小学校の時点で新聞、雑誌、段ボールは分別するよう教育されており、この3品目に限ればリサイクル率はかなり高い。そして、多くの自治体がそれら以外の雑古紙を焦点として当てているが、雑古紙には何が含まれるかも市民に認知されていないことが多い。他市にも言えることだが、リサイクル可能な紙類の資源化を増やすには、雑古紙の対策を重点的にしなければいけない。

古布の主な用途は、古着、反毛、ウエスとしての再利用が多い。昔から集めている古着は、国内より東南アジアへと流通することが多いが、冬物は流通しにくい。中国は自国の産業の発展のために古着の輸入をストップしたこともある。こうしたことが古布の現状である。(コンサル：佐久間)

- ・古布も回収に当たってのハードルが高い。(宮脇会長)
- ・雑古紙の収集はやっているが、まだまだ分別が不足している。(事務局：山下部長)
- ・つい最近まで、雑古紙としてどのようなものを捨ててもよいかということを知らなかった。表現を変えたほうが良いと思う。(西村委員)
- ・雑古紙にはどのようなものが含まれるかを、「分け方・出し方」などにもう少し細かく、分かりやすく記載したほうが良いかもしれない。(事務局：山下部長)
- ・昔から雑古紙は雑誌に挟んで出すというようにいわれたが、今では雑誌そのものの量より多くなる場合もある。雑古紙袋という、雑古紙を集める専用の袋を使っているところもある。
(コンサル：佐久間)
- ・住所が記載してある手紙等は破いて捨てなければいけない。いちいちチェックしなければいけないので煩わしい。(加藤委員)
- ・シュレッダーごみは、袋に入れて出すようお願いしている。(事務局：青木清掃センター長)
- ・はがきなども雑古紙として出せるのか。個人情報も記載しているので資源ごみとして出しにくい。
(加藤委員)
- ・悩ましいところである。(事務局：山下部長)
- ・住所や名前が記載されている手紙などは、名前や住所のところだけを切って、そのほかのものは資源ごみに出している。レシートなども資源として出している。そのような工夫をすれば可燃ごみに出す分はほんのは僅かであり、私の家では可燃ごみはミニサイズの収集袋で済んでいる。
(荒畑委員)

- ・レシートは感熱紙だが、雑古紙として排出して大丈夫なのか。(秋山委員)
- ・感熱紙もよいと最初に言われていた。(荒畑委員)
- ・私は昭島市には住んでいないが、私の自治体では感熱紙は可燃ごみとして出している。感熱紙でないレシートも最近が多いので、それであれば問題はない。(宮協会長)
- ・感熱紙は、強くこすると黒くなるので、そこで区別ができる。感熱紙は基本的には資源として出しはけない。感熱紙もよいという特定の製紙メーカーもある。この近辺では鎌倉市、川崎市だけが資源として納めているだけであり、基本的には可燃ごみとして排出する。(コンサル：佐久間)
- ・総資源化率の目標数値について、41.3%でよろしいか。感覚的には、この数字も簡単には達成できないものである。(宮協会長)
- ・いいのではないか。(加藤委員)
- ・埋立量の目標数値の設定について、ここについては具体的な数字ではなく、東京たま広域資源循環組合で年度ごとに定められる受け入れ数値を遵守するというので設定してもよいか。昭島市は今まで遵守してきているということである。(宮協会長)
- ・いいのではないか。(加藤委員)
- ・17 ページの表に記載している目標数値の年度が間違っているので、後日修正を行う。(宮協会長)
- ・「遵守」の漢字が「順守」になっているので、修正してほしい。(田中委員)
- ・訂正させていただく。(事務局：山下部長)

【質疑内容】 (項目7について)

- ・書き方についてだが、一見すると条例かと思う。市自身に取り組むことに関しては表現を柔らかくして記載されているので、市民や事業者に対しても協力を求めているのであれば、「～すること」という命令のような書き方を修正すべきである。どのような表現にしたらいいか考えると難しいが、このままだと、市民と事業者に対する命令になってしまう。(加藤委員)
- ・説明の部分では、「～します」という表現になっているので、他もそのような言い方に変更する。(事務局：峰岸課長)
- ・最初見たときの印象として、条例かと思われるような印象となっている。(加藤委員)
- ・市民、事業者、市も同等の立場なので、言い回しの修正を行う。(事務局：山下部長)

・「①発生抑制」について、簡易包装のものを優先的に購入することなどは、主婦はみんなやっていることである。しかし、食品を買うときに、既にパックで販売しているため、簡易包装のものを選びようがない。スーパーの中にはパックの食材か簡易包装の食材かを客が自由に選べるような店舗もあるので、売り手側にも求めてほしい。これでは、買い手側にだけ求めていることになる。

(荒畑委員)

・右側のページにも、事業者が行うべき努力について記載している。(宮協会長)

・簡易包装にし過ぎると、商品の見てくれが悪くなるので売れゆきが悪くなると思う。(加藤委員)

・お肉などは食材の盛り付けが綺麗でなければ、なかなか売れない。(豊田委員)

・私は内容が同じであればトレーに入っていないものを選ぶ。消費者が選べるように選択肢を用意することも、事業者としては必要だと思われる。(荒畑委員)

・消費への選択肢を増やすということか。(宮協会長)

・計画に載せたから終わりということではなく、計画策定後もそのような努力を続けることをお願いしたい。(事務局：山下部長)

・対面だったら簡易包装にしてもらい買うことができるが、対面でなくても簡易包装とパックとが置いてあれば消費者が選ぶことができる。そういう努力も必要かと思う。(荒畑委員)

・簡易包装が店頭で普及するようになればよい。(宮協会長)

【質疑内容】(項目8、9について)

・あまり関係はないが、市のごみの袋について、袋に文章が書いてあったと思うが、そこに「容器包装プラスチックは切って捨てる」や「生ごみは水切りを徹底してください」といった文章を追記してはどうか。(高橋委員)

・具体的な取り組み例をどこに示すかということである。若しくは昭島市の「資源とごみの分け方・出し方」の冊子に明記するなどではどうか。広報の話なので、是非実施をお願いしたい。

(宮協会長)

・今回新しく追加した項目として、「③適正処理の推進」の「(オ)災害廃棄物への対応」ということが書かれている。これは東日本大震災で大量の災害廃棄物が発生し処理のことが問題になったことから、災害が起きたときのごみ処理への対応について、災害が起きる前に考えておく必要があるため、追記している。(事務局：峰岸課長)

- ・事前に読んだ限りではおかしな表現もなく、以前の審議会で挙げたような、リサイクル通信で積極的に広報を実施することなども、施策の内容として記載している。(宮協会長)
- ・数字を見ているだけでは実感がわからない。関数の式などを見ても内容がわからないので、分かりやすい表現にしてほしい。(高橋委員)
- ・事務局に分かりやすい表現に修正をしてもらおう。(宮協会長)
- ・「将来を見据えたごみ焼却施設整備計画の策定」に関して、中間まとめの14ページの「(9)ごみ処理施設の将来展望」にもかかることだが、先ほど話した施策の体系では「将来を見据えて計画を検討する必要がある」と説明しているが、この程度の表現でよいか。(事務局：山下部長)
- ・以前の審議会で減価償却の話を出した。(加藤委員)
- ・更なる延命化を行うか、施設を新しく更新する、広域的な処理にシフトするなどいろいろな選択肢が挙げられるが、様々な角度からこれらを比較考量し、最も昭島市にとってよい方向で計画を決めていくという意味あいとなっている。(事務局：山下部長)
- ・延命化や広域的な処理を含めて、今後、市としてどういう選択ができるかが重要になる。先日処理場を見学しても、現状は焼却炉が2炉あるが1炉で十分処理できるということを説明された。本当に2炉も必要なのか、あるいは他市とうまく工夫・連携をすることなども含めて広域という言葉も入っているので、私はこの記載内容でいいと思う。(穴吹委員)
- ・27ページの「次世代を担う人材育成」について、内容が伴っていないので違和感がある。用法を網羅したいというのであれば、「次世代を担う」という言葉ではなく、例えば「循環型社会形成を担う」や「ごみ減量を担う」などの言葉にしてはどうか。「次世代を担う」となると、子どもの印象が強くなる。(井ヶ田委員)
- ・一般市民への普及、教育を意識した内容なので、もう少し広義な言葉を使用する。(宮協会長)

4.今後の予定について

- ・本日の質疑をもとに中間のまとめ(案)の内容を修正することについて、審議会の正副会長に一任する旨、了承された。
- ・パブリックコメントの資料がまとめ次第、委員の皆様にも共有する。
- ・12月15日～1月13日でパブリックコメントを募集する。広報及びホームページで12月15日にお知らせする。
- ・第4回の審議회를2月3日(水)午後7時から開催する。内容としては、パブリックコメントで挙げられた意見の共有や、それを反映した最終案のとりまとめを行う予定である。
- ・2月下旬を目途に市長に答申する。